私学の魂

立教女学院
中学校・高等学校

多彩な国際プログラムの体験で自分の殻を破り、自らの可能性を広げ、考えを発信できる、新時代を切り拓くアクティブな女性が育つ立教女学院の自由で無限の教育空間

京王井の頭線「三鷹台駅」から徒歩 1 分、吉祥寺や渋谷からも通いやすい交通至便な立地にある立教女学院。東京 23 区内でありながら武蔵野の自然を残すこの杉並エリアのなかでも、さらにこの立教女学院の校地には、色濃い緑と大樹が林立し、キャンパスに入ると、そこは都内の別天地です。

首都圏のミッション・スクールのなかでも、際立って厳かな趣のある校舎、礼拝堂、キャンパスのなかで過ごす生徒は、意外なほど自由でアクティブな元気印の女子中高生。その生徒たちが、この学び舎から世界に向けて、いま次々と羽ばたいていこうとしています。

向かって左が髙嶺先生、右が山岸先生

すでに創立から 138 年を数え、間もなく創立 140 周年を迎えようとする立教女学院が、その歴史と伝統のうえに、さらに新たな時代に求められる教育を果敢に導入してきた最近の変化と、それらのプログラムを体験した生徒の目覚しい成長について、今回は教頭の山岸悦子先生と、国際部・国際教育主任の髙嶺京子先生にお話を伺いました。

DATA 1

立教女学院中学校・高等学校

沿　革
- 1877 年　米国聖公会宣教師 Williams 師、文京区湯島に立教女学校を設立する。
- 1923 年　関東大震災。校舎焼失のため、池袋の立教大学に学校事務所を設け、滝乃川学園の校舎にて授業再開。
- 1924 年　現在の杉並区久我山に木造仮校舎を建設し、移転。
- 1930 年　新校舎完成。（現在の高等学校校舎）
- 1947 年　学制改革により立教女学院を設立し、小学校、中学校を併設。
- 1977 年　立教女学院創立 100 周年記念式典を挙行。
- 2001 年　中学校新校舎完成。
- 2015 年　立教女学院創立 138 周年を迎える。

校　長　和田　道雄

所在地　東京都杉並区久我山 4-29-60
ＴＥＬ：03（3334）5103
http://hs.rikkyojogakuin.ac.jp/

交　通　京王井の頭線三鷹台駅下車 1 分　ＪＲ荻窪・西荻窪駅からバス「立教女学院行き」

この３年でますます進化した、立教女学院の国際教育プログラム

いま急速に進化しつつある立教女学院中学・高等学校の教育内容に注目が集まっています。この数年でどのように進化しているのでしょうか。

「昔から力を入れてきた国際関係のプログラムが、さらにこの数年で急速に充実してきましたので、これまでの国際交流委員会を発展させた組織として国際部という部署をつくり、国際交流と国際教育とを分けて工夫していく形にしました」と教頭の山岸悦子先生。

同校では早くから国際交流に力を入れてきました。フィリピン、アメリカ、ニュージーランドにある聖公会の姉妹校との交換留学が伝統になっていて、フィリピンは 25 年目、アメリカは 15 年目、ニュージーランドは 11 年目を迎えています。そして、以前から行ってきたこれらの交換留学制度に加え、新たにいくつかのプログラムが導入されました。

「2013 年からはアメリカのカリフォルニア大学デービス校（UC Davis）で『英語でサイエンスを学ぶ』という理科系に特化した夏の短期留学プログラムを希望者 20 名で行っています。一方、学内での国際教育の一環として、英語の『エンパワーメントプログラム』と『サマーイングリッシュプログラム』というものを導入しました」と山岸先生。

海外留学や交換留学に加えて、国内でも体験できる国際教育プログラムが導入されたということです。

「本校の生徒には、そうした国際的、欧米的な学びや探究的な学習に興味をもっている生徒が多いのですが、一方で部活などにも一生懸命打ち込んでいるので、夏休みなどまとまった期間、海外に行くことができない生徒もいます。そうした事情も考え、カリフォルニア大学の学生を招いて昨年から実施したのが『エンパワーメントプログラム』です。５人のグループに１人のカリフォルニア大学の学生がついて、月曜から金曜の朝９時から 15 時過ぎまで、環境問題や高齢化、ジェンダーなどの問題についてディスカッションの相手をしてくれます。毎日、1 日の終わりにグループ毎のプレゼンテーションを行い、５日間終わったところで、個人のプレゼンテーションスピーチを 50 人の前で行います。課題探究、ディスカッション、そして英語で意見交換～発信するという一連のプログラムです。これが生徒には良い刺激だったようです」と、国際部・国際教育主任の髙嶺京子先生。

リベラルアーツ教育のコンセプトを取り入れた、エンパワーメント・プログラム。最終日には修了書を持って集合！

「次に『サマーイングリッシュプログラム』では、もう少し学年を降ろして、中１～中２から、同様に英語で意見交換～発信することに慣れていきます。この『サマーイングリッシュプログラム』を今年から行うことによって、中１から高３まで一貫して、英語で発信しつつ自分の意見をつくっていくという流れができると思っています」と髙嶺先生。

この『サマーイングリッシュプログラム』は中１～中２の生徒が対象で、『エンパワーメントプログラム』は中３～高２を対象としたものです。中 3· 高１でエンパワーメントを経験していれば、高 1· 高２での『UC Davis での短期留学』にもつながっていきますし、高１～高２での短期・長期の交換留学にも、より準備ができた状態で臨めると考えています」（髙嶺先生）

いま、グローバル化が重要課題といわれるようになった日本の教育ですが、立教女学院では、この課題に昔から取り組んできた伝統のうえに、さらにこの数年で先進的な取り組みを加えています。

「海外大学へ進学する生徒もいますし、この先の国内の大学教育のグローバル化と、本校のやっていることがリンクするだろうという意味で、2020 年からの大学入試改革にも適応できるでしょうし、いまは学内のプログラムと進路が非常にうまく結びつき始めていると思っています」と髙嶺先生。

いま「2020 年大学入試改革」を見据えて、多くの学校が教育改革に着手しようとしている現在、すでにその一歩先の歩みを立教女学院では進めています。

「まず４～５年前に、科学を英語でやろうという『サイエンス・イマージョン』というプログラムを取り入れました。『英語を』学ぶのではなく、『英語で』学ぶという発想です。その後は毎年、この先きっと必要になるだろうという確信のもとで、矢継ぎ早に新たなプログラムの導入に踏み切りました」と山岸先生。

UC Davis の農場で未来を語る！

ラム』は、UC Davis でネイティブに英語を教えている日本人の先生が開発したプログラムです。アメリカの教育を知って、日本人の高校生に足りないものを身につけるための設定で作られているものです」（髙嶺先生）

「自分の殻を破るというか…。日本人はシャイで、自分から発信することに慣れていない、そうしたメンタリティの変化を促し、そこが変わると発信ができるようになるという。単に英語ができるようになるということではなく、もっと内面的に変革をして、精神的な殻を破って、自ら発信していけるように、というコンセプトのものだと理解しています」（山岸先生）

自分の殻を破る、新たなプログラム

そうした国際交流、国際教育の新たなプログラムを導入した手ごたえはどうなのでしょうか。

「生徒がこうした体験で驚くほど変わるんです！」と山岸先生も髙嶺先生も笑顔で話してくれました。

「本当にすごいですよ。３年前に UC Davis に髙嶺先生と私の２人で約 20 名を引率して 10 日間行きましたが、生徒がまるで「ビフォー　アフター」みたいに変わって帰ってくるんです。アメリカの力というか…。自分の力を過小評価してはいけないとか、自分の価値は自分で創造するとか、パッションとか…。そういう文化を思い切り浴びてきて、自主性に火がついたのだと思います。もともと素養的に持っていたところに刺激を受けて、花開いた感じです…。帰ってきてからは何にでも積極的になり、担任の先生がびっくりするケースも多くありました」（山岸先生）

初めての海外留学体験が、生徒が本来持っている力を引き出したということなのでしょうか。

「そのときの生徒が、今年３月に卒業した学年だったのですが、結果的に進路にも直結しました。スタンフォード大学で人工ダイヤモンドなどの研究をしている日本人学生の話なども聞かせてもらったのですが、そのときに目をキラキラさせて聞き入っていた生徒が、自身の目標に目覚め、今春、東大の理科Ⅰ類に合格して進学しました」（髙嶺先生）

こうしたプログラムの人間教育という側面はどういうものなのでしょうか。

「先に紹介した『エンパワーメントプログ

国際社会における立場や事情も理解し、解決への糸口を探る平和教育へ！

「こうした経験から、生徒はどんどん動き始めるのですね。たとえば、本校は模擬国連にはまだ参加したばかりなのですが、先日も玉川学園での「核軍縮」をテーマにした模擬国連に参加しました。高校生が８名参加してスウェーデンとパキスタンの大使になったのですが、このときに印象的だったのは、あえてパキスタンを選んだ生徒が、核保有国の事情を調べて、なぜパキスタンが核を保有し手放せないのかを痛切に理解してしまい、本校では生徒たちが中３の長崎修学旅行の平和教育を経て、核廃絶の署名を集めたりしているのですが、そのときにこの生徒は「心のなかに引っかかるものがあった」ということがありました。パキスタンの事情を思うと胸がつまる思いがしたと…。

毎朝の礼拝が行われるチャペル。平和への思いを育みます。

そういうことも考えさせていくことが本当の平和学習なのではないかと私たちは考え、平和教育も、もう少しバージョンアップして次の段階に進む時期かなと考えています。もちろん、戦争の悲惨さを知るとか、平和の大切さを知るとか、戦争はいけないと考えることは大切なのですが、ではなぜ、戦争が起きるのかとか、なぜ核軍縮の話し合いが決裂してしまうのかというところを深く考え、国際情勢の難しさを知ることが、本当に平和な社会を築いていくためには大切なのだろうと」（山岸先生）

UC Davis で未来に向ってジャンプ！

これまで以上に、現実の社会の問題を、リアルで多様な視点から見据えて、解決手段を考えていくものにしたいということでしょうか。

「現実の落としどころを探っていくためには、宗教とか民族性とか歴史とか国と国との関係とか、いろいろなものを知らないといけません。大変なことではあっても、そういうものを総合して学んでほしいと思っています。もともと本校では、33 年前から土曜集会という、広い視野で考えて学ぶプログラムを行っています。これらが有機的に結びついていくことでしょう」と山岸先生。平和学習のバージョンアップも立教女学院らしい“進化”の一面なのでしょう。

友人の交換留学体験に触発されて、海外大学への進学をめざした生徒も！

また、同校では最近、長期留学の枠が増えました。

「これまでは、交換留学でアメリカとニュージーランドに 1 名ずつ約 1 年行くことができ、このプログラムでは向こうからも留学生が来るので、互いに学費が相殺されるという利点がありました。ふつうに立教女学院の学費を払う形で海外の学校に 1 年行けるという制度です。生活費は別で、選抜基準もやや厳しいのですが…。それが 2 名の枠でありました。」（山岸先生）

「交換留学の場合、向こうは通常は寮費と学費で 300 万円くらいかかるのですが、こちらは本校の学費で済みますので、かなり恵まれているのですね。先方からの留学生は国内の在校生の家庭でホームステイします」（髙嶺先生）

それが昨年から『私立高等学校海外留学推進助成金制度』というものができて、1 年間の留学には国から補助金が出ることになり、この制度を生かして、留学する生徒を増やすことができました。

「これに早速 3 名が申請してニュージーランドに行くことができて、次の年はさらに増員し、長期留学はアメリカとニュージーランドへ計 6 名が行くことになっています。単位認定留学の形で行けるので、1 年間行っても、帰国したときに学年が下がることなく復学することができます。これは生徒にとって魅力だったようで、多数の積極的な応募がありました。高 1 から高 2 にかけての 1 年間です」（山岸先生）

「今年アメリカの大学に進学した生徒は、友人がこの長期交換留学を体験した話に触発されて、海外大学への進学をめざしたと聞きました。経験した生徒が他の生徒に還元してくれる良い刺激もあります」（髙嶺先生）

「ニュージーランドのクイーンマーガレットとセントマーガレットという二つの姉妹校は、ともにバカロレア・スクールですので、向こうでの勉強もとても刺激的なようです。それも良い点ですね」（山岸先生）

もともと立教女学院中高は、学年 200 名弱の小規模校。そのなかで多くの生徒さんが留学を体験することで、他の生徒に及ぼす影響も大きいでしょう。さらに同校は今春、ユネスコスクールにも認定されました。

「本校としては独自のプログラムに加えて、ユネスコのプログラムに参加しやすくなるとか、他校や姉妹校以外にも世界中のユネスコスクールとのつながりができるとか、そういう広がりを期待しています。『次の平和教育』として、ユネスコから提供されるカンボジアのスタディーツアープログラムに参加が決まっている生徒もいますので、国内での募金などの慈善活動にとどまらず、海外でもっと踏み込んだフィールドワークのプログラムに参加することが可能になる点にも注目しています」（高嶺先生）

この６月、立教女学院×京王電鉄の、車内ポスターが京王全線に掲示

一方、最近の教育の焦点になっている「アクティブラーニング」や「ICT 教育」には、立教女学院はどのように取り組んでいくのでしょうか。

「ICT をやるために、この４月に物理室を大きく改装しました。もともと化学室と物理室はネット環境もあったのですが、机の配置を変えて、生徒がもっと話し合いをしやすくして、シミュレーションやデータ分析、動画の表示などもできるように、ホワイトボードと２台の壁面プロジェクターを入れて、異なる映像を切り替えて表示したりできる環境を設置しました。その物理室の環境を設計した担当の先生は『日本の理科教育のモデルケースをめざす』と張り切っています。中高では、そのように理科から、まずアクティブ・ラーニングに取り組んでいこうと考えています」（山岸先生）

続いて「PBL（Project Based Learning）」についても伺ったところ、ちょうどいま、ひとつの企業コラボの成果が出たところでした。

「いま『立教女学院×京王電鉄』でネット検索すると、このポスターが出てきます。高３で立教大学や他の大学の推薦・AO 入試などで大学が決まった生徒を対象とした講座で行ったことなのですが、20 数人で７つのグループをつくり、京王電鉄さんとコラボしました。マナー啓発のポスターを作る目的で、コンセプトや乗客の視点、京王電鉄が感じている問題点などについての講義を受けたうえで、グループごとにディスカションをしてポスター案を作り、京王電鉄の広報の方にプレゼンをして、意見を聞いてさらに見直しをするという手順を経て図案を練っていきました。そしてブラッシュアップした７つのポスター案のなかから選考され、最優秀作品が選ばれました。５月 20 日にプレス発表があり、６月１日から１ヶ月間、京王線、京王井の頭線のすべての駅に、このポスターが貼られることになりました。ここに『立教女学院×京王電鉄』と書かれて、本校の校章も入っています」（山岸先生）

京王線の駅構内に掲出されているマナー啓発ポスター。

「生徒の活動を見ていて思うのは、たぶん本校の生徒は、こういうことを勉強と思って取り組んでいるわけではないだろうなということです」（髙嶺先生）

このユニークな活動も、立派なアクティブラーニングであり、PBL に他ならないでしょう。

「マナーの呼びかけは日頃生徒会がしていますので、自分たちでマナー啓発のポスターを作ったら、そのマナーを大切にしないわけにいかないですね（笑）」（髙嶺先生）

こうして、多様で多彩な課題に、果敢に取り組んでいる立教女学院の生徒さんには、もともとアクティブな印象を受けます。

「確かにそうかもしれませんね。でも、生徒に聞くと、実は入学したときからそういう積極性や自分の意見を持っていたわけではないという、そういうタイプの子も多いのです。ただ、生徒会とか上級生の姿をモデルにして、私もやってみようと思う、そんなサイクルはあるように思います」（髙嶺先生）

2020 年大学入試改革とその先の社会でも、生徒はますます力を発揮する

今後、2020 年の大学入試改革が行われると、さらに立教女学院の生徒が力を発揮しそうです。

「おかげさまで英語の４技能は一貫して重視してきましたので、これからの時代と大学入試では、さらに力を発揮できそうです。高校での卒業論文指導も今年で 13 年目に入ります。まさに課題発見力や解決力を高め、プレゼンテーション力をつけるカリキュラムになっています」（山岸先生）

「結局、2020 年からの大学入試改革で求められる、英語の４技能、論文を書く力、ディスカッション、アクティビティー（課外活動）の４つとも、本校はかな

り以前から取り組んできているので、いよいよ時代がフィットしてきたなと…。」（髙嶺先生）

大学入試への対応だけにとどまらず、その先の社会と時代に求められる「共生」や「相互理解」、そして「協働（グループワーク）」のための力も、立教女学院では育ててくれるように思います。

「本校では毎年、宿泊行事があります。ミッションスクールには修養キャンプというものがあります。これを本校では 37 年前にカリキュラム化しました。それまではキャンプファイヤーやハイキングなどが主だったのですが、これに人間関係トレーニングの要素を入れて、中１は仲間づくりやエンカウンター的なプログラム、中２はもう少しロールプレイ的な要素を入れ、高１は「自立」をテーマに内面を見つめる、高３では、最終的に小グループのディスカッションですね。それを発達段階に合わせてカリキュラム化してきた積み重ねがあって、そういうものをベースに、生徒会活動とか自主的な活動がうまく回るようになっているように思います。全員の生徒に係りをつけ、もちろんリーダーもいて、夜は振り返りをして、必要な連絡を各室長が伝えるとか、そういうトレーニングを６年間、毎年していくと、生徒会活動などでも『集団を動かす』とか『仲間と協働する』センスが磨かれてきます。自分がリーダーでなくても、リーダーを支えるのはどうすればよいのかとか…。そういう自分のポジションを把握して動けるようになる。そういうベースが作られていくように思います」（山岸先生）

立教女学院の生徒には、自由ななかでも、グループとしての動きができる力を持っているように感じます。

「グループのなかで、適切な立ち位置について、役割や機能として動く、そういうことを身体で覚える経験はとても大事にしています。たとえば４月に新中１が入る前の日にオリエンテーションを 50 ～ 60 名の高３生が２～３月から準備をしてやるのですが、そのときに、リーダーとサブリーダーの立候補を募ると、毎年必ず次の瞬間に手があがって、すぐ決まります。そしてその生徒たちが会をどんどん進行してくれます。高２の終わりくらいになると、文化祭や部活のリーダーも一通り経験しているので、そこまで育ってくれていますね。こうした経験が大学ではもちろん、就職してからも役に立つと、卒業生が言ってくれることが多いです」（山岸先生）

高３生による新中１入学式前オリエンテーション！

「また今年は海外大学（アメリカ・ハバフォード大学、カナダ・トロント大学）への進学者が２人出ました。２人とも TOEFL で好成績の生徒で、120 点満点で 100 点～ 103 点を取るくらいの、だいたい英検１級くらいの高いレベルでした。でも二人とも帰国生ではなく一般入試で入った生徒です。短期留学には行きましたが、海外で暮らしたこともありません。そう考えると、結局、こうして海外の大学に出ていくことも、中高時代の経験によるのかなと感じています」（髙嶺先生）

「２人は中高時代を通し、生徒会活動や様々な課外活動にも情熱を注いできました。また、土曜集会の学びからもどんどん吸収し、めざす進路を明確に決めたのです。ただ英語ができるだけでは海外大学には合格できません」（山岸先生）

ミッション・スクールとしての揺るがぬ教育目標のもと「知的で品格のある凛とした女性の育成」をめざす立教女学院。

この教育の変化の節目を迎えた時期に、「学びの先に未来を描く」同校の高い理想と大きな可能性に、今後も注目していきたいと思います。

2001 年に竣工した中学新校舎。昨年４月には「総合体育館 2014」も完成し、学内がいっそう活気づいている！